次第
我もことゝろぬ旅日の〳〵さ哉
以ゆく見えまん 詞 是ハ唐玄宗
皇帝ニ仕の奉る方さよゝは
扨も我君まほわきつとたゝしく
ましきばかりみだをおもむし
魄をもはりし見したまのふよ
よハ゛宮ろこ登殿の美人をにぎふ

楊家の娘ハ深窓によりて玉姿を
楊貴妃とかうばせしさうし細
あけて馬嵬か原にさまよひ
やつれはてゝつなかれし魂ひ
ゑふ魂魄乃あまこりて我をゆ神
もの宮居に住む上皇落下貴妃
まなこ中世ともざらに魂魄の

あまり我志らしれん家あらんこと
蓬莱宮にゆきしに人雑小波度
蓬莱宮に休息人　我起く幻も
この願ひすりもなくたより乃
あまりのはかなしも浪路を
わきて打舟の浮きにみえし
驪山のくさのりまとの枕越ふ

詞
常世の國に住よみ久わく
ゆうたゝ遊ふ蓬莱宮に来ては
げにまくありやと有人ぞ
上ヲル
ある義に住せて蓬莱宮にあそひ
みれは宮殿甍としてきこに
過條もなく荘嚴にかゝしか
きなきし七寶をちりはめ玉

詞
漢宮萬里の遊ひもまさる遊の
百様も是にはまさりに海
庭しぬあるうぬくの底や職
又義ひきとなき中をみれは大
宮殿と家のうたきに宮あまた
先は所に排細しさとおもし
なるもうのしきたへや吹わりひは

むかしハ驪山の春乃園に共に
なかめし花も移れハ
かハるならひとて今ハ蓬莱の
秋の洞にひとり眺むる月影も
ぬるゝかほなるたもとかな
思ひしハ遠いりし八風ぞ唐乃
天子の勅乃使ひと見え参りけり

玉妃ハすゝみありましけるハ
かゝる唐帝乃使とはなかなか
こゝに来りしぞ九花の帳を
押のけて玉の簾をかゝげ給へ
玉紫(?)ふ綾(?)袖雲乃ひ(?)まつ
毛のかりとせなまく御
御まの郡このうちかみ哉

見るうちの形見よとてぞ玉の箒
とり出でてながめありあはれむたび
宝形はいやとよ見ゆ世中に
数ひきへき物なればのこり
世し給ふ我清力と君と
人志きしひちまわ給ひし言の葉
あまえず我をまもりにや庵

かくなく秋もきのふなれわ
思ひあはず数象もみ君物秋の
七月乃夜二星の契ひし言乃葉
ま成天にあらはまのなく鳥
比翼の鳥と成り地にあらは
願はくは連理乃枝とならん世と
契りし事の思ひ出のふ偽よや

私語なれどもいかなる花ざかり思ふ
濁り那　上　あ飛ども世中ぢく
流轉生死のならひとぞ見るを
馬嵬り迷ひし玉魂ハ仙宮る
下
いろわけに比翼もとけ我らへ
ひとつ翼を並べしき連理も枝
くちてだにちりまとも色を衰へしとも

同一心の趣く恋なるたびの乃
何ふを我ぞ数世るらし流れ紅くや
上音地
さらはとひて出船乃傳ひ
悩るさらとぞおもいしう袖しきらら
なをいりなら苦え人玉飛氣
まるさなるなりく小三重乃常
めくわありむもさてぬ力り

心識の理ハもおむ先天上の
玉裏よわび諸の四州の様くに
於州の千年ほ井りくちぬ
況きか不定あきりひなくなあ
なりあなれきとり屋　手於も
それの久兼上象の法仙ヽ而り
住者乃ちがの久あるてりかまり

人象よ生於るハ楊家の源定よ
屋ーー那り於ぞとことき而ひと
なりまーーに君きこしめさ於
ほくかう起めしーかうー后宮ー
きためなきふまのひ偕老同穴の
かくうひも孫ほよぬまぜえ德よ
よこ於路ふたくひとわごのへ至

なかむ秋 うつ乃ゆめ うつゝ外乃
由緒よう在遊びし女子り 外宮
すゝむ秋るゞ心もふし虚ゞく
悲しき昔の物語くゞゝくさは
月はもうはわ可ひ乃ゞもふし流
の世さしみたまもかても雕中て
まゝはとそゞ勅使ハ我まの庵里

宮秋は 哉まそもく 君まは
浅世ゞあひつ人世事も蓬り島陰る
ゞうかぬよなまとも悲しやせう
ゞの雕やふまれゞ世のすてなま
ゞふし志ほかへそ呼ゝまうさ風